

W・R・ランバスが日本から送った最初の報告書

―『南メソヂスト監督教会伝道局第四一回年次報告』とピンソン著『ランバス伝』―

池田 裕子

I はじめに

一八八六年七月、アメリカの南メソヂスト監督教会は日本ミッションを開始した。^①半年後、最初の報告書（一八八七年二月九日付）が日本から本国に送られた。報告者は、日本ミッション総理のW・R・ランバス（以下「ランバス」）である。実は、ミッションのメンバーの内、J・W・ランバス（ランバス総理の父）とO・A・デュークスは、七月二五日に神戸に到着していたが、ランバスの到着は三カ月後の一月二四日であった。言うことは、わずか二カ月半で最初の報告書を書き上げられたことになる。

ランバスの日本滞在は四年強に過ぎなかったが、一八八九年に関西学院を創立したほか、バルモア学院や広島女学院の創立にもかかわった。^②滞在中に創設された教会は一三を数える。^③これらの学校や教会にとって、なかでも関西学院にとって、この報告書は学校創立前史というだけな

く、日本や日本人に対する創立者の考えを知る上でも、最重要の資料のひとつである。にもかかわらず、これまで関西学院でその全文が取り上げられたことはなかった。そのことに私が気付いたのは、今から二〇年ほど前のことだった。ランバスが亡くなった三年後の一九二四年に刊行された W. W. Pinson, *Malter Russell Lambuth, Prophet and Pioneer* (以下「ピンソン著『ランバス伝』」) を読んだ時、そこに書かれた神戸の人口に疑問を抱いたからである。

ランバスの生涯を知る上で欠かせないこの伝記の八一―八三頁に、ランバスが日本から送った最初の報告書が引用され、日本での活動拠点を神戸に置く理由とその運営計画が述べられている。前者は、関西学院の創立前史にとって重要な情報と判断されたようで、『関西学院百年史』資料編Ⅰに英文のまま掲載されている(六四一―六四二頁)。そこに、神戸の人口が二五万人とあった(ピンソン著『ランバス伝』、八二頁)。私の記憶によると、神戸で市制が施工された一八八九年当時の人口は一三万人⁽⁴⁾だったはずである。その一―二年前の人口がその倍近くあったとは考えにくい。しかも、他の箇所⁽⁵⁾で京都と大阪の人口が、それぞれ二五万人、三〇万人と紹介されていた。開港間もない神戸の人口が「京の都」と同数ということはあり得ないだろう。『ランバス伝』は、二〇〇四年に半田一吉名誉教授により翻訳された(ウィリアム・W・ピンソン著、半田一吉訳『ウォルター・ラッセル・ランバス PROPHET AND PIONEER』、以下、半田訳『ランバス伝』⁽⁵⁾)。そこから、該当箇所(九六―九八頁、傍点は池田)を抜き出してみよう。

六、神戸は高い丘陵地の南斜面に位置し、大阪湾に達しています。酷寒の冬と炎熱の夏が支配する長い海岸線のほぼ中央に位置しており、見晴らしが良く、幅の広い立派な道路が走り、

二十五万の人々がすでに居住し、そのほかの人たちも私たちのように熱心にここに足掛かりを求めているのも当然と言えましょう。

数字に疑問を抱いた私は、ピンソンが典拠とした資料の有無をニュージャージー州にあるドゥルー大学に問い合わせた。同大学アーカイブズはメソヂスト教会の資料を保管していると聞いていたからである。アーキビストから得た回答は、ランバスが書いた報告書原本は見当たらないが、その全文が活字となつて『南メソヂスト監督教会伝道局第四一回年次報告』(一八八七年五月一日)『*Forty-first Annual Report of the Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, May 1, 1887*』に掲載されているとのことであつた。⁽⁹⁾この記録(p. 102)に、神戸の人口はどう記されているだろうか(日本語訳と傍点は池田)。

6. 神戸は高い丘陵地の南斜面に位置し、大阪湾に沿つて下つています。酷寒の冬と灼熱の夏が支配する長い海岸線のほぼ中央に位置し、見晴らしがよく、幅の広い立派な道路が走っています。既に八万人が居住し、そのほかにも私たちのように何とか足場を築きたいと切望する人がいることに何の不思議があるでしょうか?

一八八八年一月に内務省総務局から発行された『市街各邑及町村二百戸以上戸口表』(一八八六年一月二日調)⁽⁷⁾によると、神戸区の人口は八〇、四四六であるから、調査の一月後にランバスが書いた「八万人」はきわめて正確な数字と言える。したがって、「二十五万人」は、『ランバ

ス伝』の著者ピンソンによる京都と混同しての写し間違えか、校正ミスであろう。⁽⁸⁾

神戸の人口表記に関する疑問は解消したが、当初から気になっていた問題、すなわち日本ミッション開始後、本国に送られた最初の報告書の全容が関西学院で未だ明らかにされていないという根本的問題は残されたままである。むしろ、疑問解明の過程で、一層浮き彫りになったと言えるだろう。一五四九年、日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、日本到着から二カ月半後、ゴアのイエズス会員宛てに日本の状況を伝える「大書簡」を書き送った。⁽⁹⁾ランバスが日本到着から二カ月半後に書いた長文の報告書は、南メソヂスト監督教会にとつて、この「大書簡」に匹敵するものである。遅ればせながら、その全文（日本語訳と原文）を明らかにし、同教会の日本ミッション開始直後の動きを振り返っておこう。

II 日本語訳

日本ミッション 一八八六年開始 A・W・ウィルソン監督担当

最初の報告

南メソヂスト監督教会日本ミッションの幕開けは一八八五年五月六日です。伝道局の第三九回年次会議の初日、キーナー監督から次の議案が提出され、伝道局⁽¹⁾によって承認され、議事録が公開されました。⁽¹²⁾

「決議、日本ミッションを設立し、三千ドルを充当する」

同年九月、本国からの要請を受け、神学博士J・W・ランバス師が日本の海岸線と内陸部の調査に赴きました。一〇月、大いに満足して中国に戻り、大変有益な報告書を伝道局に提出しました。⁽¹³⁾

宣教師の任命

一八八六年四月二〇日ナツシユビル発、五月二〇日上海着の中国ミッション担当マクテヤ⁽¹⁴⁾監督からの書簡により、J・W・ランバス、W・R・ランバス、O・A・デュークスが日本に任命されました。書記と会計担当からも確認の書簡が届き、上記の中国の宣教師は、七月一日をもって日本ミッションの一員とみなされることが明確に示されました。

二年から三二年に及ぶ中国との絆は⁽¹⁵⁾簡単に断ち切れるものではありませんでしたが、七月二十五日までにデュークス氏とJ・W・ランバス夫妻は日本の神戸に上陸しました。⁽¹⁶⁾上陸して最初の食事は手づかみで食べ、最初の夜は机の上で過ごしたにもかかわらず、神が自分たちをイエス・キリストの救いの福音の比類なき使者として島国に遣わされたことを喜びました。こうした日々と出来事は、今となつては歴史であり、記録に残すべき事柄です。

ウイルソン監督の来訪

北京の病院での仕事に従事しており、⁽¹⁷⁾代わりの人が見つからなかったため、私はすぐに家族を伴つて日本に赴くことができませんでした。そこで、単身でウイルソン監督に会うことにしました。私は、監督とコリンス・デニー師⁽¹⁸⁾に横浜で落ち合い、一緒に神戸に向かいました。⁽¹⁹⁾父と母が

上海に上陸してからちようど三二年後の九月一七日夕刻、⁽²⁰⁾ ウィルソン監督を議長として、日本ミツシオン創設会議を開催しました。⁽²¹⁾ それは、私たち全員に長く記憶される出来事でした。豊かで円熟した考えに満ちた指導者の言葉、祈り、学ぶべき経験、監督とデニー兄弟二人による祝福、私たちの情熱を刺激し、信仰を深めてくれる本国からの温かい支援。監督は日本で多くのことを見聞きし、大いに満足されましたが、私たちが時間をかけて状況を掴んでから私たち自身に計画を立てさせた方が賢明とお考えになり、明確な伝道計画を示されませんでした。

九月二三日、私はウィルソン監督、デニー兄と中国に戻り、⁽²²⁾ 共に北京に赴きました。そこで、後継者クルー博士を見つけました。⁽²³⁾ 彼は、重慶の暴動により中国西部を追われたところでした。⁽²⁴⁾ 私は家族を伴って再び日本に向かい、一月二四日、神戸に到着しました。⁽²⁵⁾

第一回四季会⁽²⁶⁾

そうこうする内に、第一回四季会が開催されました。それは鈴木「愿太」⁽²⁷⁾ 氏の受洗によって特別なものになりました。その数日前、鈴木氏は、私の父に立派な手紙を手渡し、受洗の希望を明らかにしました。それは、信仰の根拠と福音を宣べ伝える決意を表明した立派な手紙でした。この青年は上海で八カ月間、父の指導を受け、通訳として父に同行したのです。日本におけるこの初めての洗礼は、神の恵みのしるしとして彼の心に記されました。そして、こんなにも早い時期に初穂が得られたことは、神の恵みと近い将来の豊かな実りの証しであると、私たちは受け取めました。現在、彼は神学を学んでいます。彼に教会の祈りを！この四季会で、神戸の師範学校、商業学校、医学校、中等学校の学生のために読書館を開設することが決まりました。⁽²⁹⁾ 淡路島には

定期的に、瀬戸内海を三二〇キロ西に行った広島には毎月訪問しています⁽³⁰⁾。現在のところ、人口八万の広島では、キリスト教に改宗した砂本〔貞吉〕船長が熱心な働きをしています。彼は、サンフランシスコでギブソン博士の下で改宗し、そこで数年働きました⁽³²⁾。その間に夜間学校で学び、キリスト教の知識を得ました。日本に残した身内のことが気になってアメリカを離れ、数カ月間、自給しながら十字架の話をしました。このひたむきで無学な男の働きの結果、五人の名が洗礼志願者として、J・W・ランバスにより報告されました。船長の母、弟、叔父、従兄弟がそうです。一六〇名の生徒を抱える学校で教える文士は、聖書を求めています。二五〇名の生徒を擁する学校の長を務める仏教の僧侶は、漢文聖書を熱心に欲していました⁽³⁴⁾。仏教の仕事はその言語で行われるので、彼は文字が読めるし、漢文を好むのです。このことは大きな励みとなりました⁽³⁵⁾。

教会議会議会⁽³⁶⁾

神戸メソヂスト教会、最初の教会議会議会は一八八六年二月三日、J・W・ランバス宅で開催され、そのほかの興味深い事実が明らかになりました。

1. 教会員は、欧米人六名、中国人一名⁽³⁸⁾、日本人一名。
2. ロシア人の赤ん坊に洗礼を授けました。
3. 二組の結婚式を挙げました。一組はO・A・デュークス博士とM・ベネット嬢。もう一組はW・H・パーク博士とノラ・ランバス嬢⁽³⁹⁾。
4. 読書館は毎晩オープンし、大勢の出席者がいます。バイブル・クラスの五人は既に洗礼志願者です。

5. W・B・パルモア師⁽⁴⁰⁾が世界旅行の途中立ち寄られ、これらの青年に純粹で健全な図書を提供するため、毎年百ドル寄付して下さることになりました。日本の図書館や書店には、無神論や不可知論があふれているからです。そこで、この読書館をパルモア学院と呼ぶことにしました。⁽⁴¹⁾パルモア兄は、本国から本も送ってくださいます。メンフィス年会のW・B・マクドナルド師も、二年間、毎年一二五ドルという多額の寄付をしてくださいました。これは、同じ目的のために使われることになっています。既に一〇一冊の本が寄贈されました。本国の良き友から、郵便でさらに送られてくる予定です。
6. 日曜学校出席者は平均二〇名です。神戸に数百人いる中国人⁽⁴²⁾のための日曜学校を間もなく始めることになりました。神戸在住の中国系の若い女性が同胞のために働きたいと強く願っているからです。
7. 次の日曜から、教会のための土地購入募金を毎週集めることになりました。⁽⁴³⁾
8. 女性陣は皆、よく働きました。デュークス夫人は、特に男性陣が不在の時、読書館を支えてくれています。J・W・ランバス夫人は、学校の核となる人物を身の回りに集めています。彼女は、中国にいた時よりはるかに現地の女性に溶け込み、どんな指導も感謝されています。既婚女性は、一団となって英語や外国の習慣や聖書を学んでいます。神戸の素晴らしい女性六〇人がそうした勉強のために集まり、聖書講読の時間を一五分から三〇分を増やすよう教師に求めました。それは、彼女たちがキリスト教を学び始めて二週間も経たない頃の出来事でした。私の患者の一人である裕福な海軍士官が今朝（二月七日）、私を訪ねてきました。この女性クラスに関する私の問い合わせに対する回答の中で、私が語っ

たことを補強し、彼の妻が深い関心を寄せ、彼自身も妻と共に聖書を学んでいると付け加えました。私たちを手伝ってくれる本国からの女性が必要です。私たちの仕事は、私たちには達成不可能と思われた規模にまで間もなく到達するでしょう。

第二回四季会

〔第二回四季会〕が二月三一日に開催され、方針に沿って前進することが決まりました。瀬戸内海を端から端まで二往復しました。広島島の洗礼志願者は五人から二七人に増えました。その内訳は、腕の良い医師一名、医学生数名、役人一名、学校教師二名、神主一名、船長〔砂本貞吉〕の親戚数名です。船長自身、疲れを知りません。三月にカリフォルニアに戻るため、自分の時間を最大限活用しました。デュークス氏と私が広島にいる間、冬の強風の中、彼は夜間にポートで島を訪れました。そこで十字架について語り、同じような天候の中、ほとんど凍えながら戻りましたが、明るく、希望と熱意にあふれていました。こうした繰り返しで、彼は健康を害し、アメリカの友人のもとに早く戻ろうと考えました。南メソヂスト監督教会は、サンフランシスコにミッシヨンホームを持つべきではないでしょうか？　そこで、この友好的な島民を歓迎すれば、その影響はメキシコ湾の源流のように、絶えず日本帝国の沿岸を暖めてくれます。メソヂスト監督教会はこの機関の重要性を認識し、サンフランシスコで日本人と中国人双方の間で成功を収めています。⁽⁴⁾日本人は、特にアプローチしやすいです。サンフランシスコにいる九百人余りの中で、一三〇人以上が既にクリスチャンだと公言しています。日本人は、アメリカ人のことを親しい友人で、支持者だと見ています。過去二カ月の間に、私は日本人から一二回以上そう言われました。

今のところ、移民に障害はありません⁽⁴⁶⁾。日本人は、主にビジネスの方法などを学ぶため、アメリカの学校に来ます。その数は、年々増加しています。先月、私たちの友人と共に五人が行きました。三月か四月には砂本氏と共に二五人⁽⁴⁷⁾が行きます。ブラジルでの経験を持つランソム兄⁽⁴⁷⁾がこうした人々の間で仕事を始め、皆がキリスト教の影響下に置かれるようになることを願っています。さらに、この三カ月の間に欧米人一名が証明書により教会員と認められ、神戸における仕事強化されました。北の内陸部を訪問し、三つの巡回区―琵琶湖、神戸、広島―が組織されました。それぞれ、O・A・デュークス、W・R・ランバス、J・W・ランバスが担当しています。

引き続き、一八八七年一月三日にミッション会議が開催され、デュークス氏が会計、J・W・ランバス氏が書記に選ばれました。日本ミッションの年度は一〇月一日に始まり、九月三〇日に終わること、年会を一〇月**第三週**に開催することが決まりました。そうすると、コレラ流行期⁽⁴⁸⁾が終わってから監督に來日していただき、二週間滞在して年会を開催、それから、一一月の年會に間に合うよう中国に行っていました。一八八七―八八年の予算が検討され、J・W・ランバスにミッションの歴史家としての活動が要請⁽⁴⁹⁾されました。そして、メソヂスト監督教会と友好関係⁽⁵⁰⁾に入ること、同教会の東京の出版事業を後援⁽⁵¹⁾することが決議されました。これまで述べてきたことからわかるように、私たちは本国のメソヂストの理念に沿ったミッションを遂行するため、最大限の努力をしています。日本で必要とされているのは、**粘り強く、知的で、組織的な巡回**です。もしこれが正しければ、メソヂストは確かにこの仕事に大変向いています⁽⁵²⁾。私たちは自分たちの役割を果たさなければなりません。

位置

私たちは神戸を活動拠点とすることに決めました。1. 神戸を正式な活動拠点とします。南メソヂスト監督教会は、ここから北に三二〇キロ、南に四八〇キロを占めます。2. 神戸は完成が急がれている鉄道路線の中心です。⁽⁵³⁾ 3. 神戸は四季を通じ、日本でもっとも衛生的な港です。4. 神戸は瀬戸内海を見渡し、沿岸航行船がすべて停まります。⁽⁵⁴⁾ 5. 条約港として、ほぼ毎週、アメリカ、中国、イギリスと結ばれていて、内陸部では得られない利点があります。居住権自体、条約港以外の場所では、日本の団体に教師として雇われられない限り、条約改正が批准されるまで許されません。⁽⁵⁵⁾ 6. 神戸は高い丘陵地の南斜面に位置し、大阪湾に沿って下っています。酷寒の冬と灼熱の夏が支配する長い海岸線のほぼ中央に位置し、見晴らしがよく、幅の広い立派な道路が走っています。既に八万人が居住し、そのほかにも私たちのように何とか足場を築きたいと切望する人がいることに何の不思議があるでしょうか？

運営計画

これまでに練り上げた計画は次の通りです。1. 神戸を拠点、ならびに補給地とします。2. 同市を通り、北東および南西に伸びる基本線を確立します。この線を鉄道で北東に三二キロ進むと大阪に達します。大阪は、人口三〇万の日本帝国第三の都市です。⁽⁵⁷⁾ さらに、神戸から七六キロ進むと京都に達します。京は西の都で、一二世紀にわたり世間から隔絶された帝がおられる神聖な場所でした。今なお、仏教と神道の大きいなる拠点です。しかし、今や京都には日本でもっとも活気あふれるキリスト教の学校〔同志社〕も存在します。さらに、官公立、私立を問わず多くの

学校があります。神聖な京都の丘に祀られている無知と迷信を払拭する確実な方法は、丘の下の平野に、キリスト教と科学を学ぶ学生で溢れる簡素な白壁の建物(83)を点在させることです。神戸から、私たちは人口二五万のこの都市―帝国第二の都市―(89)を徹底的に打ち砕く楔を打つことができますでしょう。さらに一八キロ進むと、長さ二四キロの琵琶湖に達します。そこに、私たちの琵琶湖巡回区があります。

一方、神戸から南西に進むと、瀬戸内海の北岸沿いに五つの地方を通って、ここから三二〇キロ離れた広島に至り、広島巡回区につながります。そこからさらに同じ方向に一六〇キロ進み、周防の国の首都である山口を超えると、陸の端に出ます。本州の最西端です。幅わずか一・六キロの関門海峡で、私たちは九州で活動しているメソヂスト教会の仲間と出会います。(91)現在のところ、私たちは通訳の力を借りて神戸からこのラインで働いています。できるだけ早く、本国からの男性を北東の大阪、京都、琵琶湖、南西の尾道、広島、山口、下関に配置したいと考えています。これら南西のポイントはいずれも重要な商業の中心であり、瀬戸内海の数百の島、数千の村に影響を及ぼしています。内陸部が山岳地帯のため、日本の人口は海岸線に沿った狭い地域に集中しています。北岸はシベリアおろしの寒風が吹き荒れるので、人々は火山帯の南斜面に集中します。そこが私たちの活動の場です。まだ十分ではありませんが、一カ所だけ宣教師が常駐しています。私たちは来るのが遅かったのです！(92) 神のご意思により私たちに残された場所を精一杯開拓しましょう！ この魅力あふれる現場に、毎年少なくとも男性二名の派遣を求めます！

見通し

日本における〔見通しは〕大いに期待が持てます！一五年という短期間でこんなにも完璧な大変革をやつてのけた国は、世界中どこにもありません。⁽⁶³⁾ 間を結びつけるものもないまま、一九世紀が封建時代のすぐ後に接ぎ木されました。その驚くべき結果は、平和であり、繁栄でさえあるのです。このような国民は、気が多く、影響を受けやすく、明らかに子どもじみているという欠点があります。しかし、上で述べた三百年の飛躍を忘れてはなりません。気まぐれでも、浅はかでも、知性が弱いわけでもないのです。国民議會は大いなる英知に特徴づけられています。⁽⁶⁴⁾ 義務教育が行われています。⁽⁶⁵⁾ アメリカやドイツ〔プロイセン〕の最高の制度が取り入れられてきました。⁽⁶⁶⁾ フランスのナポレオン法典を法律の指針としています。⁽⁶⁷⁾ 七年前に七〇%下落した自国通貨は回復しています。⁽⁶⁸⁾ 新政権への莫大な支出を考えると、金融の達人です。憲法は一八九〇年に国民に与えられるでしょう。⁽⁶⁹⁾ 天の子として崇拜されてきた天皇側の驚くべき讓歩です。伝承によると、天皇は天照大神から数えてわずか**四代目**〔**五代目**〕に当たる神武天皇の一二二代目の直系子孫です。さらに驚くべきことは、この讓歩が自発的に快く行われるのです。今のところ、こんなにも善悪の影響を受けやすい国民はありません。日本は、一時停止、または休眠していて、これから形を表す前段階にいます。この時期に、活力あるキリスト教が入ることがこの国の将来を決めるかもしれません。アメリカ人は、日本人のベストフレンドと見なされています。宣教師は、国民からも役人からも高く評価されています。当代のもつとも有能な思想家は、宣教師の存在と働きについて、好意的な文章をしばしば日刊紙に寄せています。⁽⁷¹⁾ 宣教師は、官公立学校や私立学校の理事会からも**求められています**！⁽⁷²⁾ 神道は兵糧攻め、仏教は絶え間なく戦術を変え

ています。実のところ、最後の戦いです。現地の機関は、ミッションの仕事の強力な要素です。複数のミッションで自給の達成を！⁽⁷³⁾ 条約改正は、治外法権問題を解決し、外国人がパスポートなしで自由に内陸部に入ることを認めます。⁽⁷⁴⁾ 毎月**五百人**近くが新たに教会に足を運び、二百カ所で四千八百人が毎日集まって聖書を読んでいます。⁽⁷⁵⁾ その内数百人はまだ洗礼を受けていませんが、中には偶像崇拜の他宗派の僧侶もいます！このような結果、何が起こるでしょうか？ キリスト教徒が責務を果たせば、**キリストのための日本**になるでしょう！

一八八七年二月九日、神戸

日本ミッション総理

ウォルター・R・ランバス

私たちの教会が占める領域で、日本ほど期待が持てることはありません。日本ミッションは、東洋伝道に長けた人々の手に委ねられています。右記報告書は、教会中の伝道者と会員の心を奮起させるでしょう。神は、日本の扉が開け放たれていることを示しています。中に入って、そこで活動しませんか？

* 文中の太字は、原文でイタリック表記の部分。

Ⅲ 原文（英語）

ランバスが日本から書き送った最初の報告書（『第一回年次報告』掲載）の中から、ピンソンが『ランバス伝』に引用したのは、「位置」(LOCATION)と「運営計画」(PLAN OF OPERATIONS)である。それらに関し、ピンソンの引用文と年次報告掲載文を比較したところ、一四箇所（神戸の人口を含む）に表現の違いが見つかった。

英文として、それぞれの違いに意味はあるのだろうか。たとえば、ピンソンは強調等の意図があつて、ランバスとは異なる単語を用いたのかもしれない。しかし、英語を母語としない私には、そのあたりの判断が難しい。そこで、ルース・グルーベル第一五代院長にお願いして両者に目を通していただき、ご意見をうかがった。

結論として、神戸の人口以外の箇所には、意味上大きな違いはないと思われるとのことであつた。表現の違いの主たる原因は、ピンソンが本の出版を急いだことによるチェック漏れと推測される。ただし、次の箇所については、ランバスの言葉から伝わる熱い思いとピンソンの事務的な言葉遣いから受ける印象の差にいささか戸惑いを覚える。

ランバス

We call for at least two men each year for this inviting field!⁽¹⁷⁾

この魅力あふれる現場に、毎年少なくとも男性二名の派遣を求めます！

ピンソン

We call for at least two men a year for this program! ⁽⁷⁸⁾

この計画を成功させるために、毎年少なくとも二人の人物を派遣されることを要請いたします。⁽⁷⁹⁾

今後の便宜のため、巻末にランバスの報告書原文を掲載する。⁽⁸⁰⁾ピンソンと表現が異なる箇所については、ピンソンの引用文を注記した上で、グルーベル元院長からいただいたコメントを加えた。

IV おわりに

関西学院の歴史執筆は、ピンソンの『ランバス伝』(二〇〇四年以降はその半田訳)に頼り過ぎていた。ピンソンが引用した原資料と直接向き合う姿勢に欠けていた。学校の創立やその背景を本気で探ろうとするなら、こうした姿勢は大いに反省すべきである。⁽⁸¹⁾

ランバスと同年齢のピンソンは、一八七八年にテネシー年会に加わり、テキサス、ジョージア、ルイスビルの年会を経て、一九〇六年から伝道局でランバス総主事の補佐を務めた。一九一〇年にランバスが監督に選ばれると、その後を継いで総主事になった。既にいくつかの編著書があったピンソンは、ランバスの死後三年で『ランバス伝』を書き上げ、⁽⁸²⁾刊行した。執筆者として、ピンソン以上に相応しい人物はいなかったと思われる。私たちがその著書に頼りきってきた原因はここにある。

執筆に当たり、総主事のピンソンが伝道局所蔵資料を活用したのは当然であるが、さらに、遣族や関西学院関係者や日本での教え子が書いたものも集められている。こうした資料や、本人を直接知る人びとの言葉に裏打ちされたランバスの生涯をピンソンの言葉で解説されると、休むことなく世界を駆け巡ったその働きの大きさに圧倒されてしまう。しかし、資料は資料として冷静に受け止め、疑問を感じたら、調べることを怠ってはならない。その上で、長年身近でランバスを見つめてきたピンソンだからこそ描けたランバス像に、私たちはもっと目を向けるべきではないだろうか。

ピンソンは資料を紹介しながら、思わず笑みがこぼれるようなエピソードを巧みに織り交ぜ、こう書いている。⁽⁸⁴⁾「ランバス監督は、決してユーモアを忘れなかった。どれだけまじめな気分でも、笑いで常に近くにあった。…いつも精神的緊張や疲労といった状態からユーモアのある明るいところへとうまく逃れ出て、健全な笑いで気苦労の圧力をかわしてしまうのだった。このユーモアという人間特有の要素が彼を元気づけ、重荷を背負った精神を鼓舞し、心の健全さと親切さを保つ助けとなっていた。熱心さのあまり常軌を逸するということはなく、フアリサイ的な独善に陥ることもなかった。そのユーモアを解する心が彼を守り、しっかりと現実を見据えさせていたといえる」。

こうしたランバスの姿は、わずか四年の日本での活動の中にも見出せる。ランバス一家の最初の通訳兼日本語教師となった鈴木愿太は、才気煥発型のランバスの日本語学習は聞き覚ええた単語をすぐに使ってみるといふやり方だったため、びっくりするような間違いを犯すことがあったと語っている。若く美しい女性のことを「別嬪」というと鈴木が教えた数日後、元町かどこかを歩

いていた時、この言葉にふさわしい女性を見かけたランバスは、「あちらから鉄瓶が来ました」と言った⁽⁸⁶⁾。また、関西学院第二代院長を務めた吉岡美国は、小柄で瘦身のランバスの手足はいつも冷たかったと語っている。だから、握手の度に必ず、「Excuse my cold hand.」と断っていたそうだ⁽⁸⁷⁾。さらに、瀬戸内海を船で航行中、台風に遭遇した時のエピソードをランバス自身がユーモラスに描いている。「頭上の甲板がめりめりと割れて、ぼっかり口を開いてしまった」恐ろしい夜が明けると、「瀬戸内海は島々にとりまかれて、まるで天国のように見えた。日本の人達も夜の恐怖はすっかり忘れて、私の頭の様子を見て大笑いしていた。理由を尋ねると鏡を見てごらんなさいということだった」。あわてて頭に手を当てたランバスは、ご飯と漬物を包んだ竹の皮に頭を突っ込んでしまっていたことを知るのである。「にかわのようになった米粒をすっかりとるのに二時間近くもかかった。そして暫くは毛そのものも抜けてしまうのではないかと思われた」。

一九二一年九月二六日、日本訪問中に発病したランバスは横浜で亡くなった。死の床で口述筆記された数々の書簡にすら「微笑の淡い光を見ることができるとピンソンは指摘する。そして、その姿を東洋の使徒と言われたフランシスコ・ザビエルにだぶらせ、こう書いた。⁽⁸⁸⁾「…彼はいつも死の危険を伴う病に苦しめられながら、敢えて危険をおかしていた。人は近代における伝道の祖ザビエルのことを思い起こすであろう。…このロヨラ〔イエズス会初代総長〕の不屈の弟子については、そのすぐれた精神は尽きることがなく、時には生の喜びに溢れて飛び跳ねたり走ったり笑ったりしながら、少年のような陽気な心で仕事にいそしんだと言われている」。

リングを空に投げては上手に受け止めながら、京の都に向かう籠と馬のあとを小走りずついで行つたと伝えられるザビエルの姿⁽⁸⁹⁾をピンソンはランバスの中に見ていたに違いない。その心弾む

様子は、ランバスが日本から本国に送った理論的で分析的な最初の報告書からも容易に読み取ることができる。

ランバスの日本での告別式は、一〇月三日に原田の森の関西学院で行われた。その時、初代神学部長として学校創立の苦労を共にし、その臨終に立ち会った J・C・C・ニュートン第三代院長は、どんな時もユーモアを忘れなかった故人を「世界全体の市民」と呼び、「キリストの心をもつが故に、世界の心をもっていました」と偲んだ。⁽⁹⁾ ランバス家の母教会、パウルリバー・チャーチ（ミシシッピ州）に建立されている記念碑にランバスの名と共に刻まれた言葉は、「世界市民、そして世界各地へのキリストの使徒」(World Citizen and Christian Apostle to many lands) であつた。⁽¹⁰⁾

【注】

- (1) 南メソヂスト監督教会の日本ミッシヨン開始は、最初のプロテスタント宣教師の来日より二〇年近くも後のことで、東京を中心に有力なキリスト教（主義）学校が既にいくつか開校されていた。この遅れの原因は、主として南北戦争にあると考えられるが、中国ミッシヨン責任者の Y・J・アレックが日本伝道に積極的ではなかったとの指摘もある（『関西学院百年史』通史編 1、一九九七年、四四～四五頁）。注（62）参照。
- (2) 残念ながら、一三四年の歴史を有するパルモア学院は二〇二〇年二月末で休校となった。併設のパルモア学院英語専門学校も二二年三月末で休校する（『学院史編纂室便り』第五二号、二〇二〇年一〇月一五日、一頁）。
- (3) ランバス滞在中に創設された二三の教会は、神戸栄光教会、広島流川教会、宇和島中町教会、八幡浜教会、大分教会、東梅田教会、姫路五軒邸教会、* 兵庫松本通教会、* 杵築教会、多度津教会、

岩国教会、[※]御影教会、[※]佐伯教会である(神田健次『W・R・ランバスの使命と関西学院の鋳脈』、関西学院大学出版会、二〇一五年、二七―三九頁)。当初講義所だった四教会(※)を除き、九教会とされることもある(野田和人「ランバス父子が見えてきた―ランバス日本宣教一三〇周年に当たって―」『関西学院史紀要』第二三号、二〇一七年、一〇四頁)。

(4) 「明治三二年(一八八九)兵庫、神戸両区と荒田、葺合両村とが一つとなり市制が施工された。当時の面積はわずかに二二km²、人口も一三万余にすぎなかった」(『兵庫県大百科事典』上巻、神戸新聞出版センター、一九八三年、八七四頁)。

(5) 関西学院は、創立者ランバス生誕一五〇周年記念事業の一環として、ランバス著、山内一郎訳『ヴァンダビルト大学コールレクチャー キリストに従う道―ミッシヨンの動態―』と共に、『ランバス伝』の翻訳版を二〇〇四年一月一〇日(ランバスの誕生日)に刊行した。それ以前に出版された『ランバス伝』の部分的翻訳としては、山崎治夫『地の果てまで―ランバスの生涯―』(一九六〇年)と、山崎のドラフトから関西学院に関係する部分のみを抜き出し、創立七十周年記念として出版された、今田恵『関西学院創立者ランバス伝』(一九五九年)がある(山内一郎「第一回関西学院歴史サロンのウォルター・R・ランバスの人と思想」『関西学院史紀要』第一号、二〇〇五年、一四三頁)。また、関西学院キリスト教主義教育研究室は、一九八〇年から九〇年にかけて、『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』を五冊刊行した。その内容と訳者は次の通り。(1)「中国―一つの解釈」(保田正義)、「日本雑記」(半田一吉)、「ウォルター・R・ランバス書簡集」(宮田満雄)、(2)「朝鮮雑記」(宮田)、「ハワイおよびインド編」(半田)、(3)「ブラジル・メキシコ・アフリカ」(保田)、「H・D・ハート著『W・R・ランバス―宣教師としての生涯と事業―』」(宮田)、(4)「ヴァンダビルト大学コールレクチャー 世界をキリストへ―ミッシヨンの動態―」(山内一郎)、(5)「アフリカ伝道への祈りと足跡」(中西良夫)。

(6) Email of July 11, 2019, to Yuko Ikeda from Frances Lyons, Reference Archivist, General Commission on Archives and History, Drew University. 『第四一回年次報告』の“Japan Mission”の部分は、教

- 会のアーカイブズがドゥルルー大学に移る前、ノースカロライナ州レイクジュナラスカ (Lake Junaluska) に置かれていた時代に、関西学院から小林信雄神学部教授が調査に行き、既にコピーが持ち帰られていた。同教授が同地を訪れたのは、一九七四年が初めてであった(小林信雄「学院史資料の収集について」(2)―海外関係―『資料室便り』第三号、関西学院学院史資料室、一九八六年九月、二頁)。なお、メソヂスト教会史研究において重要な公的記録については、気賀健生「日本メソヂスト教会年会記録その他」(『青山学院史料センターだより』一一号、二〇一四年二月一五日)に詳しい。
- (7) 国立国会図書館デジタルライブラリにて閲覧可。
- (8) 『日本基督教団神戸栄光教会百年史』(二〇〇五年)の「第一章 教会創立前後の動向」は、『ランバスの伝』からの引用ではなく、ランバスによる「最初の報告書」を紹介しているにもかかわらず、神戸の人口を二五万人としている(九一頁)。
- (9) ネストリウス派のキリスト教(景教)がザビエルの千年前に中国から日本に伝わったとする説もある。関西学院文学部教授村上博輔は「景教とは今から千二三百年前、支那の其頃即ち唐の代、長安の都を中心として行はれて居た基督教のことであります。唐の代に此教が行はれて居たらうとは昔は殆ど誰も知らず」と説明している(『唐景教考』『密教研究』第八号、密教研究会〈高野山大学内〉、一九二二年、一〇六一頁)。
- (10) ザビエルは一九四九年八月一日にポルトガル船で鹿児島に上陸した。その船の帰航に合わせ、二カ月半後の一月五日付で四通の書簡を認めた(尾原悟『ザビエル』、人と思想一五六、清水書院、一九九八年、一一八―一九頁)。ポルトガル語で綴られた「大書簡」の日本語訳は、河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』三、東洋文庫五八一、平凡社、一九九四年。
- (11) 南メソヂスト監督教会の「伝道局」(Board of Missions)は、一八四五年にケンタッキー州ルイビルに設置された。一八六六年以降、別々に存在したテネシー州ナッシュビルの「内国伝道局」(Board of Home Missions)とメリーランド州ボルティモアの「外国伝道局」(Board of Foreign Missions)

- が一八七〇年に統合し、ナッシュビルに本部が置かれた（前掲書『関西学院百年史』通史編Ⅰ、四〇～四一頁）。
- (12) この時の議事録 (*Thirty-Ninth Annual Report of the Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South*, 1885) の該当箇所は、『関西学院百年史』資料編Ⅰ、一九九四年、六四八頁に収録されている。
- (13) J・W・ランバスが伝道局に提出した日本の調査報告についてドゥルー大学に問い合わせたところ、報告書の原本は残っていないが、『第四〇回年次報告』（一八八六年五月一日）の「中国ミッション」の中の“MISSION TO JAPAN” (pp. 93-94) がその報告にあろうとのことだった (Email of Oct. 15, 2020, to Yuko Ikeda from Frances Lyons)。
- (14) Bishop McTyeire の綴りとカナ表記は統一が取れていない。『関西学院史紀要』創刊号（一九九一年）では McTyeire（二八二頁、二八四頁）、前掲書『関西学院百年史』通史編Ⅰではマクティリア（四六六頁）、『南美宣教五十年史』（一九三六年）では「マクテヤ」（五頁）と記されている。表記の混乱については、過去にも指摘されている（木下隆男「関西学院と『尹致晃日記』」『関西学院史紀要』第七号、二〇〇一年、七四頁）。本稿では、綴りはランバスの報告書の“McTyeire”（本人の著書 *A History of Methodism* にも Holland N. McTyeire とある）、カナ表記は一八九三年に日本で発行されたマクテヤ著、M. I. ランバス、倉鋪定次郎訳『聖書歴史問答』の「マクテヤ」を採用した。
- (15) J・W・ランバスは一八五四年に中国に派遣されたので三二年の絆であった。一八八四年に中国に派遣された O・A・デュークスは二年の絆と言える（ジャン・W・克蘭メル編『来日メソジスト宣教師事典一八七三～一九九三年』、教文館、一九九六年、一五〇頁、七二頁）。
- (16) 七月二五日にランバスの両親と妹、デュークスが名護屋丸で神戸港に到着したことは *The Higo News*, July 26, 1886 の“Shipping Intelligence” で確認可能 (“Per str. Nagaya-maru, from Shanghai and Ports: For Kobe: Dr. and Mrs. Lambuth, Miss Lambuth, D. Dukes, ... 1 European and 13 Japanese in steerage.”)。最後にある三等船室の一三人の日本人の内の一人が通訳として同行した鈴木愿太であろう。鈴木によると、デュークスの婚約者 M・I・ベネットと中国人少女二名も同行

- している（鈴木愿太「私の受洗まで」『近畿教壇』第七六号、一九四六年、四頁）。来日の一年後、「二二カ月前の今日、知人もなく、一人の教会員もなく、礼拝の場所もない神戸に私たちは上陸しました」とM・I・ランバスは書いている（Letter of July 26, 1887, from M. I. Lambuth to A. L. West of Richmond, Va., Possessed by Millsaps College）。なお、名護屋丸は、一八六六年に米国で建造されたオレゴニア号を郵便汽船三菱会社が七五年に購入し、改名した船である。八五年、同社が共同運輸と合併したことにより誕生した日本郵船会社の所有となった（木津重俊編『日本郵船船舶一〇〇年史』（世界の艦船、別冊）、海人社、一九八四年、三七頁）。J・W・ランバス一行が七月二三日に上海から英船チベット号で神戸に入港したとする文献もある（藤原美幸「若ランバスと老ランバス」『歴史と神戸』第二八巻第一号、一九八九年二月一日、三頁）。
- (17) 当時、ランバスは蘇州から北京に移り、メソヂスト監督教会と協力してロックフェラー病院の先駆と言える病院の仕事に従事していた（半田訳『ランバス伝』、八四～八五頁）。「昨年（一九八五年）、私の家族には病気が絶えませんでした。一二カ月の内八カ月は、絶え間ない看護に明け暮れました」（*Fortieth Annual Report of the Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, May 1, 1886, p.99*）と、ランバス自身が報告していることから、北京への移動は家族の病気が主たる原因だったと考えられる。なお、メソヂスト監督教会の機関誌 *Gospel in All Lands* (January 1886, p. 42) には「妻の健康問題」と言及されている（洪珉基「米国の南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教に関する研究—M・C・ハリスとW・R・ランバスの日韓活動を中心として—」、博士論文、関西学院大学、二〇一八年二月二七日、一二八頁、同大学リポジトリより閲覧可）。
- (18) Collins Denny は、一九一〇年に監督に就任した（*Who's Who in American Methodism, 1916, pp. 56-57*）。
- (19) 九月一日、妹の婚約者W・H・パークと共に近江丸で上海から神戸に到着したランバスは、翌日、同じ船で横浜に向かった（*The Higo News, Sept. 13, 1886*）。そこで、ウィルソン監督たちと落ち合い、再び神戸に戻ったのだろう。近江丸は、一八八四年に英国で建造された共同運輸の新造船。翌年の

- 合併に伴い、日本郵船会社の所有となった（木津前掲書、五一頁）。なお、藤原前掲文には、ランバスは九月一三日に仏船タナイス号で横浜に到着し、ウィルソン監督らと共に英船ハンブシーヤ号で九月一六日に神戸に着いたとある（五頁）。
- (20) 二三年前の一八五四年九月一七日の日記にランバスの母メアリーはこう記している。「帆が巻き上げられ、船が停止し、上海港まで船を安全に導く水先案内人が乗り込みました」(Mrs. M. I. Lambuh's Diary)。
- (21) 神戸栄光教会は、その前身の神戸美以教会が設立されたこの日（一八八六年九月一七日）を教会の設立日としているが、同時に、一〇月二日や一二月三日を設立日とする説も紹介している（前掲書『神戸栄光教会百年史』、八〇頁、八九〜九〇頁）。
- (22) ランバスは、九月二三日に東京丸で長崎に向かっている（*The Hiogo News*, Sept. 24, 1886）。東京丸は一八六四年に米國でコーネリアス・ヴァンダビルトのために建造されたニューヨーク号を七四年に日本政府が購入し、改名した船である。翌年、郵便汽船三菱会社に払い下げられ、八五年の合併により日本郵船会社の所有となった（木津前掲書、三九頁）。この時、中国ミッシヨンの年会は一月一七日から二四日まで上海で開催された。日本ミッシヨン総理として、ランバスはそのオープニングと第二セッシヨンに参加した（*Forty-first Annual Report of the Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South*, p. 77）。
- (23) G. B. Crews は、一八八三年から重慶担当の医療宣教師（メソヂスト監督教会）だった（“Directory of Missionaries,” *Sixty-sixth Annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church*, January 1885, p. 18）。
- (24) 一八六〇年前後から義和団運動の前夜にかけて、中国各地で仇教運動（キリスト教排撃の運動＝反洋教運動）が起こった。北京条約でキリスト教伝道が全面的に解禁されたあと、中国内地に進出したカトリック、プロテスタント諸派は、いたるところで中国官民の敵意に遭遇し、宣教師殺傷、教会破壊、信者迫害などの教案（宗教関係の刑事事件）が続発した（平凡社『大百科事典』四、

一九八四年、一七八頁)。一八八六年には重慶の教会が攻撃された(『山川世界史小辞典』改訂新版、二〇〇四年、一七五頁)。

- (25) 一月二四日にランバスとその家族が横浜丸で到着したことは *The Hiogo News*, Nov. 24, 1886 の “Shipping Intelligence” で確認できる (“Per str. Yokohama-maru, from Shanghai, via Ports: for Hiogo: Mrs. Pit Brown, Dr. and Mrs. W. R. Lambuth and child. …”)。したがって、前掲書『神戸栄光教会百年史』に、「W・R・ランバスは J・W・ランバス夫妻よりやや遅れてその年の九月十五日に神戸に到着、夫人はさらに遅れて、十一月二十四日に到着した」(八六〇八七頁)とあるのは不正確である。なお、横浜丸は、一八八四年に郵便汽船三菱会社のために英国で建造され、翌年の合併に伴い日本郵船会社の所有となった船である(木津前掲書、三八〇三九頁)。藤原前掲文では、ランバス一家は一月二二日に独船エレクトラ号で香港から神戸に到着したことになっている(七頁)。

- (26) 「四季会と云うのは、メソヂスト教派に属する個々の教会の公式な役員会で、春夏秋冬各季に開催せられるので四季会と称したのである」(前掲書『神戸栄光教会七十年史』、一九五八年、六頁)。第一回四季会の記録は、J・W・ランバスが筆記した記録 (*Records of the Japan Mission, M. E. Ch. So., from Oct. 1st to Sept. 1st, 1889*) に含まれている。これは、フランシス・ブレイ (Frances N. Bray) 夫 W. D. Bray は一九五二年から八〇年まで関西学院大学神学部教授を務めた) が、ニューヨークのメソヂスト教会伝道局図書館 (Library, Board of Missions of the Methodist Church, 475 Riverside Dr. New York 27, N. Y.) で入手したコピーとその翻刻版を学院史編纂室に寄贈したものである(恐らく一九七〇年代のことと思われる)。それによると、第一回四季会は一八八六年一月二日、三日にランバス一家の住居である神戸外国人居留地四七番で開催されたこと、メンバーは W・R・ランバス(総理)、O・A・デュークス(会計)、J・W・ランバス(書記)の三名であるが、W・R・ランバスはウィルソン監督等と共に既に中国に戻っていたため欠席していたこと、鈴木を受洗が三日だったことがわかる (pp. 23)。

- (27) 上海で「英人ダラスの塾に学び又城内の支那宿屋に宿泊して支那語を研究する傍ら、何事か立身の緒を掴まうと奔走した効も無く、放浪殆んど十ヶ月を費やした」鈴木は、メソヂスト監督教会の女性宣教師ヴェールの紹介状を手にランバスの父を訪ねた。「色々話したい事があるから是非来て呉れる様にとの事で私共の初会見が終つたが、之れが明治十九年の二月頃と記憶して居る」(鈴木前掲文「私の受洗まで」)。「青山学院校友会会報」第一八号(一九一三年一月、三九頁)にも、「ミス、ヴェールより紹介状を得て」と鈴木は書いているが、前掲書『南美宣教五十年史』では、「ピシヨップ夫人」の紹介状を持って訪ねたことになっている(六頁)。これは、Jennie S. Vailが一九一六年に青山学院の Charles Bishop と結婚したためである(前掲書、『来日メソヂスト宣教師事典 一八七三〜一九九三年』、二七四〜二七五頁)。なお、ウィルソン監督の来日を一〇月と鈴木が書いている資料(前掲文「私の受洗まで」および「故ランバス監督」『教会時報』第一五七三号、一九二一年一〇月二八日、五頁)があるが、これは九月の誤りであろう。鈴木とランバス一家の関係については、池田裕子「南メソヂスト監督教会日本伝道の初穂、鈴木愿太の生涯―宣教師ランバス一家との関りを中心に―」『関西学院史紀要』第一二号、二九〜八五頁参照。
- (28) 当時神戸にあったのは、兵庫県尋常師範学校、県立神戸商業学校、県立神戸医学校で、中等学校(High School)はなかった(『兵庫県百年史』、一九六七年、二六五〜二七二頁)。
- (29) 前掲書『関西学院百年史』通史編Iに、「到着(一月二四日)二日後、早くも彼は居留地四七番の住居で父J・W・ランバスが始めていた夜間英語学校に『読書館』(Reading Room)を設けて活動を開始した」(五六頁)とあるが、読書館開設はランバス不在の一〇月初めに開催された四季会で既に決まっております(J. W. Lambuth, *op. cit.*, p. 2)。開館式が行われたのが一月二六日であった(J. W. Lambuth, *op. cit.*, p. 4)。「開館式順序」は、前掲書『南美宣教五十年史』に掲載されている(八頁)。
- (30) 「西洋人は当時まだ自由に旅行が出来なかつたので、行く先々、私が警察に行つて、許可を貰ふと云ふ次第であつたが、広島では警部長が、同郷の人であつて、大に便宜を得た」と、南メソヂスト監督教会宣教五〇年記念懇親会(一九三六年一月三日)で、鈴木は語っている(迅雷居〔村上謙

- 介)「著聞集」『新星』第四号、関西学院中学部、一九三六年、二七頁)。
- (31) 前掲の「市街各邑及町村二百戸以上戸口表」によると、広島市の人口は七八、九一七人(三三三頁)。
- (32) 砂本については、今田寛『広島女学院を創立した人たち』(学校法人広島女学院、二〇〇八年)に詳しい。ただし、同書が砂本の出国を一八八二年とし(三三三頁、三七頁)、サンフランシスコでのギブソン(Gibson)からの受洗を一八八三年五月七日とする(三四頁、三八頁)のは疑問が残る。同書が典拠としたのは『創立者砂本貞吉先生一レリーフ除幕を記念して』(一九八六年、三頁)で、『日本基督教団広島流川教会年表 創立百周年記念(一八八七〜一九八七)』、一頁)にも、そのように記載されている。また、藤原前掲文も、広島流川教会や広島女学院の刊行物を典拠として、一八八二年出国、八三年受洗としている。ところが、『福音会沿革史料』によると、砂本がサンフランシスコの福音会に入会したのは一八八一年一月一二日である(阪田安雄他編『福音会沿革史料』現代史料出版、一九九七年、三二二頁)。といふことは、一八八〇年出国、一八八一年五月七日受洗が正しいように思われる(前掲書『南美宣教五十年史』一七頁、『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、一九八八年、七二八頁、前掲書『関西学院百年史』通史編1、六一頁)。さらに、「福音会員名簿」も、砂本の渡航年月日を「明治二三年(一八八〇年)」としている(『在米日本人社会の黎明期『福音会資料』を手がかりに』、同志社大学人文科学研究所、一九九七年、三〇四頁)。同書には一八八四年七月に砂本が福音会会長に選出されたことも記されている(吉田亮「付録 役員一覧」、一七八頁)。いずれにしても、砂本の渡航年については、外交史料館で「旅券発給記録」を調べる必要があるだろう。
- (33) J. W. Lambuth, *op. cit.* p. 5によると、五人の名は次の通り。Mr. Mito, an elderly gentleman, & his Mrs. Mito, Mrs. Sunamoto, the mother of our Brother Sunamoto, Mr. N. Sunamoto, her son & Mr. Masuhara. 広島での初穂(一八八七年三月)は砂本の叔父水戸久次であった(『日本基督教団広島流川教会年表 創立百周年記念(一八八七〜一九八七)』、一頁)。
- (34) 幕末以来、日本に流入した漢訳聖書の多くは、一八六三年に上海美華書館から刊行された『新約全書』と『旧約全書』だった(前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、三五二頁)。日本では、クリシタン

時代に聖書の部分訳がなされ、「一六〇〇年代には京都で新約聖書が全訳出版されたという記録もある」が、「今日これをしつさい目にするのが出来ない」。したがって、「真の意味で、日本語聖書の翻訳の歴史はプロテスタントによって始まったと言えよう」。一八七二年、在日プロテスタント宣教師らによる聖書翻訳委員会が組織された。七六年以降、『新約聖書』分冊本が順次出版され、八〇年に『新約全書』が完訳刊行された。旧約聖書の日本語訳は、一八八二年より分冊版の刊行が始まった。八七年に分冊本が完成すると、翌年、その分冊本を合本した『旧約全書』が刊行された。(門脇清、大柴恒『門脇文庫 日本語聖書翻訳史』、新教出版、一九八三年、三五頁、一五五頁、一九二頁、一九九～二〇〇頁)。

(35) 上海で生まれ育ったランバスは、書かれた中国語が日本で通じることを知って、どんなに心強く思ったことだろう。このことは、日本にキリスト教を伝えたザビエルも指摘している。「日本人は(中国人の)書いたものは理解しますが、話すことはできません。∴話す時には互いに通じないので、書く時には文字だけによって理解しあいます。彼らどうし、話し言葉は違っています(けれど)文字の意味は(共通で)、それを(双方ともに)知っているからです」(書簡第九七、一五五二年一月二十九日、『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』三、二九～三二〇頁)。

(36) Church Conference は、前掲書『南美宣教五十年史』では「教会々議」(一一頁)、前掲書『神戸栄光教会七十年史』では「教会々議(総会)」(九頁)、前掲書『神戸栄光教会百年史』では「教会会議」(八八頁)とされているが、『南メソヂスト監督教会教理及び条例』(一八九六年)によると、「教会議会」で、「凡駐在所に於ては毎月一回巡回区に於ては各任所に少くとも毎三ヶ月一回其所属会員及当初在住の年会員相集り教会議会を開くべし」とある(四八頁)。

(37) 神戸外国人居留地四七番。

(38) 中国人一名は、ランバス家の雇人である(前掲書『神戸栄光教会七十年史』、九頁)。

(39) 一〇月六日、ランバスの妹ノラ・ランバスは、ランバスの親友である中国ミッシヨン所属の医師W・H・パークと結婚した。同時に、O・A・デュークスもM・ベネットと結婚した(J. W. Lambuth, *op. cit.* p.

4. 同記録では N. I. Bennet)。なお、パークに関しては、*Memoirs of Dr. W. H. Park of Soochow, 1882-1927*, [1936] があつた。
- (40) William Beverly Palmore は、ミズーリ州に広大な農場を持ち、生涯独身で通した。教会誌 *St. Louis Christian Advocate* の編集長を務め、世界を漫遊し、その見聞録を寄稿していた。神戸には、チャプマン (M. B. Chapman) と共に立ち寄った (S. H. Wainright, "Our Recollections of Palmore," *Special Edition of the Palmore Messenger*, The Palmore Alumni Association and the Palmore Students Association, 1936, p. 25).
- (41) パルモア学院は、毎晩七時から九時まで開館し、土曜夜にはデイベートが行われた (前掲書『南美宣教五十年史』、八頁)。なお、W・B・パルモアの訃報が掲載された新聞 (*The New York Times*, July 5, 1914, p. 7) には、日本のパルモア学院とメキシコのパルモア学校 (Collegio Palmore) の創立に大きな役割を果たしたと紹介されている。墓はミズーリ州マルタ・ベンド (Malta Bend) の Little Grove Cemetery にある (池田裕子「ミズーリ州での調査—パルモア、ウエンライト、ヴォーリス—」『学院史編纂室便り』第三九号、二〇一四年六月、六—八頁)。
- (42) 〈表1〉「神戸華僑人口の推移」によると、一八八六年に六三〇人、八七年に五九七人の清国人が神戸にいた (西島民江「明治前期における神戸華僑への視線」『待兼山論争』日本学篇二七、大阪大学、一九九三年、一七頁)。
- (43) 一八八八年五月、歯科医雨夜孝太郎が所有する下山手通五丁目の土地一四〇坪が購入された (前掲書『南美宣教五十年史』、一三頁)。
- (44) 一八七七年、アメリカ初の日本人団体としてサンフランシスコに福音会が設立された。設立に尽力し、物理的に福音会の近くにおいて指導援助を惜しまなかったのは、一八六八年以降、メソヂスト監督教会在米中国人伝道部総理を務めていたギブソンであった。一八八五年には日本人五五七人がサンフランシスコに在住しており、その過半数が年齢一五歳から二五歳の留學生で、現地で労働しながら学ぶ「出稼ぎ書生」だった。「明治十七、八年から同廿二、三年にかけて、米国に渡つた書生

連中、福音会の世話にならぬものは殆ど稀であつた」と鷲津尺魔の回顧録にある（吉田亮「サンフランシスコ福音会の異文化受容教育活動」『在米日本人社会の黎明期』同志社大学人文科学研究所、一九九七年、一二五～一三〇頁）。

- (45) 『官報』第九〇六号（一八八六年七月九日）によると、この頃、サンフランシスコとその周辺に住む日本人が急増している。一八八三年末に二五〇人だったが、八五年に五〇八人となり、八六年には五八八人が現地の領事館に届け出ている。これ以外に、届け出していない者が二〇〇人以上いると推測されている（九七頁）。ランバスが報告書を書いたのはこの半年後なので、さらに増加し、九〇〇人を超えていても不思議ではない。

- (46) 一八六六年、幕府が海外渡航禁止令を廃止すると、国外への移民が始まった。長期間他国に居住し、農業労働、あるいは各種産業の非熟練労働に従事するという狭義の近代移民は、一八六八年のハワイ移民一五三人を先駆に、八〇年代から本格化した（平凡社『大百科事典』一、一九八四年、一一九五頁）。

- (47) 南メソヂスト監督教会牧師 John James Ransom。一八七六年から八七年までブラジルに派遣された（*Ransom Family Papers, 1833-1957, Tennessee State Library and Archives*）。

- (48) 急性伝染病コレラの流行期は夏。日本で初めて発生したのは一八二二年だった。大流行した一八七七年、七九年、八二年、八六年、九〇年、九五年には、全国の患者数合計が四万五千人を上回った（鈴木晃仁「近代日本におけるコレラの伝播」(一)『日本医学雑誌』第五一卷第二号、二〇〇五年、二二三頁）。死亡率が二〇%もあり、恐れられたことから、俳人の興味を引き、夏の季語になった。外来語が好きでなかった高浜虚子も、「コレラ船いつ迄沖にかかり居る」等、一九一四年にコレラの句を三句作っている（高橋悦男「季語になった外来語」『早稲田社会科学総合研究』第五巻第一号、二〇〇四年七月、一二六頁）。

- (49) J・W・ランバスは、日本ミッションの記録に一八八五年から八九年九月までの出来事をまとめた（*Minutes of the Annual Meeting of Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South, Third*

Session, September 1889, pp. 23-26)。

- (50) 当時、本国アメリカで南北に分裂していたメソヂスト監督教会が日本では協力体制に入ったことになる。北米におけるメソヂスト教会の歴史は、一八世紀に英国国教会から分離したメソヂスト派がアメリカ、カナダに渡り、一七八四年にボルティモアの年会でメソヂスト監督教会が組織されたことに始まる。一八四三年、奴隸問題でウエスレアン・メソヂスト教会が分かれ、さらに四五年になると、南北に分裂して南メソヂスト監督教会が誕生した。この南北両教会と一八二八年に監督制を否認して分離したメソヂスト・プロテスタント教会が一九三九年に再合同し、合同メソヂスト教会となった。なお、メソヂスト監督教会（アメリカ北部）と南メソヂスト監督教会（アメリカ南部）とカナダ・メソヂスト教会は、本国に先んじ一九〇七年に合同して日本メソヂスト教会を組織した（前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、一三九五頁）。
- (51) 一八八五年九月に開催されたメソヂスト監督教会の日本年会で設置が決まった同教会の出版・頒布機関への協力を指すと考えられる。これは、現在の教文館（キリスト教出版社、キリスト教図書販売店）の前身のひとつである（前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、四〇二～四〇三頁）。
- (52) メソヂストの祖ジョン・ウエスレーが伝道に費やした馬での旅は地球を九周（約三六万キロメートル）するに及んだという。六六年間に行った説教は四万回以上で、一日に二、三回説教したことになる（清水光雄『メソヂストって何ですかーウエスレーが私たちに訴えること』、教文館、二〇〇七年、五六頁）。
- (53) 一八七四年五月、大阪―神戸間の鉄道が完成し、イギリス製車両四両編成の列車がイギリス人運転手により、一日八往復運転された。三年後の二月には京都―神戸間が開通、そして、一八八九年七月、新橋―神戸間の東海道全線が開通した。その前年には、山陽鉄道の兵庫―明石間が開通していた（『兵庫県大百科事典』下巻、神戸新聞出版センター、一九八三年、二四七頁）。
- (54) 西南戦争の軍需基地となった大阪には数多くの汽船会社が発立され、船舶一〇隻余り、船主七〇名以上に達した。瀬戸内航路を主として運航するそれらを統合し、一八八四年に大阪商船会社（現在の株式会社商船三井）が発立された。設立時の定期航路は一八本線、四支線あり、一八本線中

一三本が神戸港、四本が兵庫津に寄港した。残り一本は大阪―和歌山線であった(『大阪商船株式会社八〇年史』、大阪商船三井船舶株式会社、一九六六年、七―一九頁)。一八五八年に締結された日米修好通商条約により取り決められたのは兵庫の開港であったが、一〇年後、実際に開港したのは、兵庫から陸路で四キロ離れた人口三千六百人の神戸村^{かんべ}だった。兵庫津は、天下の台所大阪の外交的な役割を果たしており、人口二万人を擁する商業・交易の中心地であった(楠本利夫『国際都市神戸の系譜―開港・外国人居留地・領事館・弁天浜御用邸―』、公人の友社、二〇〇七年、三八―四二頁)。神田健次は、南メソヂスト監督教会による伝道の足跡を交通手段(陸路・海路)の発展と重ねて考察し、「瀬戸内伝道圏構想」と名付けた(神田前掲書、三―二〇頁、「ウォルター・R・ランバスの瀬戸内伝道圏構想(第一三回関西学院歴史サロン)」、『関西学院史紀要』第一二号、二〇〇五年、一八一―二〇四頁、「学術資料講演会要旨 ウォルター・R・ランバスの『瀬戸内伝道圏構想』」、関西学院大学図書館『時計台』No.75、二〇〇五年、一〇―一七頁等)。

(55) *The Hogo News* (Dec. 3, 1886)によると、前日の神戸港到着は高知から一隻、出航は横浜・函館行きと上海・長崎行きであった。停泊中の船二隻の情報もあり、それぞれの行き先は、ロンドン、横浜、仁川、ルアーブル・ハンブルグ、ニューヨーク、ルアーブル・ハンブルグ、上海、横浜、横浜、横濱、香港とある。

(56) 「一八九九年七月一七日(および八月四日)に条約改正が実施され、領事裁判権(治外法権)の撤廃とともに、全国の外国人居留地が廃止され、内地雑居が始ま」った(中島耕二『近代日本の外交と宣教師』、吉川弘文館、二〇一二年、二〇六頁)。

(57) 前掲の「市街各邑及町村二百戸以上戸口表」によると、大阪の人口は二八九、一五四人(七頁)。

(58) 一八八九年にランバスが関西学院を創立した際、原田の森に最初に建てられた校舎はまさに「簡素な白壁の建物」であった。その二二年後、カナダ・メソヂスト教会から関西学院に派遣された最初のカナダ人宣教師の一人であるC・J・L・ベーツは、「一八八九年の創立時に建てられた小さな古い木造プラスチック(石灰または石膏を主材料とした塗装剤)づくりの校舎…」と書いている(C.J.L.

- Bates 著、池田裕子訳「1. 二つの回想録」、ルース・グルーベル監修『ベーツ宣教師の挑戦と応戦』、関西学院大学出版会、二〇一九年、一五頁。
- (59) 前掲の「市街各邑及町村二百戸以上戸口表」によると、京都の人口は二三六、八七四人(六頁)。ランバスは、大阪の方が人口は多くても、少し前まで都が置かれていた京都を東京に次ぐ第二の都市としている。
- (60) 神戸から山陽道を通って広島に至る際、播磨、美作、備前、備中、備後を通る。
- (61) 一八七三年に宣教師を派遣したアメリカ北部のメソヂスト監督教会は、一八八五年に福岡英和女学校を創立していた。また、長崎県には活水女学校(一八七九年)と鎮西学院(一八八一年)があった(土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』、新教出版社、一九八〇年、六九〜七〇頁、七七〜八〇頁)。
- (62) 「主要外国ミッション一覧表」(一八九六年現在)に挙げられた三一ミッション中、南メソヂスト監督教会より早く日本伝道を開始したミッションは二二を数える(土肥前掲書、一一〜一四頁)。
- (63) 「一五年という短期間」とあるので、一八七〇年代初頭以降を指すと思われる。日本で切支丹禁制の高札が撤廃された一八七三年がランバスの頭にあつたのかもしれない。一八五九年にアメリカ本国から来日したプロテスタント宣教師第一号であるJ・C・ヘボンはこう書いている(一八八七年五月八日付書簡)。「わたしが日本に来て以来二十八年の間に目撃した政治的变化は、急速に生じたものでありまして、地球上のどここの国の歴史にも、このような大変革をみることはできなかったと思います。他の国々の人々に、普通にあてはめることのできる一般的判断の基準は日本人にはほとんどあてはめることができません。日本人は独特な国民です」(杉本つとむ『西洋人の日本語発見 外国人の日本語研究史一五四九〜一八六八』、オンタイム出版創拓社、一九八九年、二二六九頁)。
- (64) 一八八一年、天皇勅諭をもつて国会開設(一八九〇年)が国民に約束された(平凡社『大百科事典』五、一八八四年、九五〇頁)。
- (65) 学制公布は一八七二年。一八八五年の学齢児童就学率は四九・六二%だった(角知行「日本の就学

率は世界一だったのか』『天理大学人権問題研究室紀要』第一七号、二〇一四年、一四頁。
(66) 一八八一(明治一四)年、いわゆる「一四年政変」が起こった。北海道開拓使の官有物払い下げと国会開設論をめぐる、政府内で伊藤博文、井上馨、黒田清隆ら薩長派と大隈重信ら急進派との対立が激化した。その結果、大隈が失脚し、それまでのイギリス的政治からドイツ的政治に大きく変わった。(木津前掲書、一四頁)。

(67) 日本政府は、近代法典を成立させるに当たり、ヨーロッパでナポレオンの諸法典の評価が高いことからフランス法をモデルとすることに決め、フランス人法学者ポアソナードを招いた。明治政府の法律顧問として、日本に二二年間滞在したポアソナードは「日本近代法の父」と呼ばれる(平凡社『大百科事典』一三、一九八五年、七二五頁)。明治大学、法政大学、関西大学の前身を立ち上げた創立者がいずれもポアソナードの教えと支援を受けていたことから、二〇一八年から翌年にかけて、三大学で特別展示「ポアソナードとその教え子たち」が巡回された(年史編纂室「三大学連携協力締結記念特別展示『ポアソナードとその教え子たち』の記録」『関西大学年史紀要』第二七号、二〇二〇年、六九～八五頁)。ポアソナードについては、岩波新書に大久保泰甫『日本近代法の父 ポワソナード』(一九七七年)があると井上琢智前学長よりご教示いただいた。本稿を閲読くださった前学長からは、このほかにも多くのご助言をいただいた。

(68) 西南戦争が起こった一八七七年から翌年にかけて、政府紙幣と国立銀行紙幣の発行が増え、その後紙幣の価値が下落した。一八八一年には銀貨一円と引き換えるのに約一円七〇銭の紙幣が必要となった。松方正義は、増税や官営事業払い下げなどにより財政を改善させ、金貨・銀貨の蓄積と紙幣の回収を進めた。これによって物価は下落し、紙幣の価値は回復に向かった(日本銀行金融研究所『貨幣博物館常設展示図録』二〇一七年、七九頁)。ここで、ランバスが用いた「七〇%下落」⁴⁴ “discounted seventy per cent.” という表現に疑問を抱き、金融論が専門の田中敦経済学部教授に確認したところ、次のご教示をいただいた。「今の感覚だと、紙幣一円の価値が銀貨で一円から一円÷一円七〇銭≒五九銭になったので四一%の下落であるが、七〇銭は下落前の価値一円の七〇%

に相当するので、七〇%の下落と書いたのかもしれない。このあたりは、時代と業界によって表現が違おうと思う」。

(69) 大日本帝国憲法は一八八九年二月一日に公布され、一八九〇年一月二十九日に施行された。報告書を書いた一八八七年二月初頭の時点で、ランバスはこのことを知っていたことになる。この大日本帝国憲法第二八条で、信教の自由が臣民の権利として認められたが、「安寧秩序を妨げずおよび臣民たるの義務に背かざる限りにおいて」との制限が付けられていた(前掲書『日本キリスト教歴史大辞典』、六九六頁)。

(70) 『日本書紀』によると、神武天皇は天照大神の第五世代子孫(来孫)に当たる。

(71) 福沢諭吉が『時事新報』(一八八六年一月一八日)に寄せた小論には「当初日本人の目に最も厭ふ可き切支丹の宣教師が今は外国人の中にて最も親愛す可き朋友と為り、苟も耶蘇教の宣教師とあれば日本人が其教義を信ずると信ぜざるとに論なく概して其宣教師の人と為りを信ぜざる者なし」とある(中島前掲書、一〇四頁)。かつてキリスト教排撃論者だった福沢は、五年前の『時事小言』には、「耶蘇宗教と国権論と相互に撞着して両立し難きの勢を見る可し。…耶蘇宗教の蔓延は、後世子孫、国権維持の為に大なる障害と云ふ可し。今日の信者にして其蔓延を助成するものは、自ら国権を利減する人と云ふ可し」と書いている(白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち』知られざる明治期の日英関係、未來社、一九九九年、三〇頁)。白井は、英国国教会の宣教団体SPG (The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts 英国海外福音宣教会) 所有の海外宣教文書(オックスフォード大学ロウズ・ハウス・ライブラリ所蔵)を調査し、「福沢は」少なくとも一九人のキリスト教各宗派の宣教師と関わりをもち、特に三九歳以降最晩年に至るまで英国国教会の宣教師たちと密接な交流を続けてきた」と紹介している(同書一四頁)。

(72) ランバス自身、和歌山県尋常中学校英語教師として採用が決まっていたが、一八八七年七月に来日したC・B・モズレーがランバスに代わって一〇月一日から雇用された。また、ランバスの弟ロバートも、八八年七月に徳島県尋常師範学校と尋常中学校の英語教師として採用されている(国立公文

- 書館デジタルアーカイブ)。文明開化時代に主として欧米から日本に招かれた、所謂「お雇い外国人」は、政治、法律、軍事、外交、経済、金融、諸産業、交通、教育、学問、芸術など広範囲にわたっていた（平凡社『大百科事典』二、一九八四年、一一四四頁）。その数は、ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』（小学館、一九七五年）の「明治初年より同二二年までのお雇い外国人国籍別人数」によると、「イギリス九二八、アメリカ三七四、フランス二五九、中国（清）二五三、ドイツ一七五、オランダ八七、…合計二、一九九」である（四九三頁）。
- (73) 南メソヂスト監督教会が一八八六年に日本で最初に創設した教会（南美以神戸教会、現在の日本基督教団神戸栄光教会）は、一八九四年に自給教会となった（前掲書『神戸栄光教会百年史』、九四頁）。
- (74) 注(56)参照。
- (75) 一八八六年には、プロテスタントだけでも、少なくとも四〜五千人が受洗したと推測される（高橋昌郎「日本プロテスタント史入門」『日本プロテスタント史の諸問題』雄山閣、一九八三年、三二八頁）
- (76) グルーベル元院長の見解も、本稿「はじめに」で指摘したのと同じく、ピンソンは神戸と京都の人口を混同したのだろうとのことであった。
- (77) *Forty-first Annual Report of the Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, May 1, 1887, p. 103.*
- (78) *W. W. Pinson, op. cit., p. 83.*
- (79) 半田訳『ランバス伝』、九九頁。
- (80) 報告書の英文入力は学院史編纂室の石野利香さんをお願いした。
- (81) このことは、小林信雄が『関西学院史紀要』創刊号（一九九一年）で既に指摘している。「関西学院の歴史を研究するに際して、創立者ランバスの伝記も批判的に検討し、研究することは不可欠の仕事であるが、この批判的なランバス伝の研究は、まだ進んでいない。ほとんどなされていないと言ってもよいであろう。これは、他の学園の創立者に比べて顕著なところである」（二七九頁）。
- (82) 半田訳『ランバス伝』、三二八〜三二九頁。*Who's Who in American Methodism, 1916, p. 171.*

- (83) 一八八八年五月に来日し、神戸を訪れたJ・C・C・ニュートン（関西学院初代神学部長、第三学院院长）は、七月一六日付書簡に「ランバス親子ほど熱心な人を私は見たことがありません。彼らは昼も夜も休みなく働いています。実際、本当に必要なとされるだけの休息もとっていません」と、東京にいる妻に書き送っている（池田裕子「J・C・C・ニュートン第三学院院长の足跡を訪ねて」『関西学院院史紀要』第九号、二〇〇三年、一九一〜一九二頁）。
- (84) 半田訳『ランバス伝』、一五八頁。
- (85) イエスは群衆と弟子にこう語ったとされる。「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座（伝統的権威を象徴する席であったと言われている）に着いている。だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見做ってはならない。言うだけで、実行しないからである」（「マタイによる福音書」二三章一〜四節）。「ファリサイ派は、ユダヤ教の一派。キリスト教では、善行を他人には説くが、自らは実行しない偽善者という意味の比喩的表現としてよく用いられる」と、新約学がご専門の広島大学大学院人間社会科学研究所の辻学教授よりご教示いただいた。
- (86) 迅雷居（村上謙介）前掲文、二六頁。
- (87) 吉岡美国「ランバス先生のことゝも」『新星』第五号、関西学院中部部、一九三七年、一二三頁。
- (88) ウォルター R・ランバス著、半田一吉訳、「日本雑誌」『ウォルター・ラッセル・ランバス・資料』関西学院キリスト教教育史資料Ⅲ、一九八〇年、八八〜八九頁。
- (89) 半田訳『ランバス伝』、二五五〜二五六頁。
- (90) 山口から京にむかったザビエルは、一五五一年一月、堺で豪商「日比谷工藤」の客として丁寧にもてなされた後、都に向かうある貴人の籠の護衛に加えてもらえることになった。喜び勇んだザビエルは、シヤム帽をかぶり、リンゴを空に投げては上手に受け止めながら、いつになく幸せそうに、籠と馬の後を小走りですべていった（ホアン・カトレット著、金子桂子訳『東洋の使徒 聖フランシスコ・ザビエル』、新世社、一九八七年、一四一頁）。後年、カトレット神父は、ザビエルが投げ

ていたのは「イエズス会の覚書ではリングゴとなっているが、ベルナルドがリングゴと言ったということとはありえない。なぜならリングゴはもつと後年、前世紀になってから〔日本に〕もたらされたからである」として、「ミカンかカキのことだろう」と訂正している（ホアン・カトレット著、高橋敦子訳『初めてヨーロッパに行った日本人 薩摩のベルナルドの生涯』、教友社、二〇一三年、三四頁）。確かに、西洋リングゴの本格的な導入は明治以降であるが、鎌倉時代以降の文献に「林檎」が見られることから、一六世紀には中国渡来の和リングゴが存在していたはずである（平凡社『大百科事典』一五、一九八五年、七四九頁）。なお、ザビエルが生まれ育ったザビエル城（ナバラ国）の聖堂に置かれたマリア像とその子ども右手にはリングゴがあり、ザビエルはその前でよく祈っていたという（カトレット前掲書、一九八七年、一〇頁）。

(91) 半田訳『ランバス伝』、二五九～二六〇頁。

(92) 池田裕子「J・W・ランバス夫妻中国伝道出発一五〇年、W・R・ランバス生誕一五〇年に寄せて」故郷パールリバーとランバス・デー」『学院史編纂室便り』第一八号、二〇〇三年一月二八日、二～八頁。教会は一九七三年に閉鎖され、ミシシッピー年会の史跡となったが、今も一〇月第一木曜日には地元の教会員が集まり、「ランバス・デー」の礼拝が守られている。